
連鎖～検診

華山楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

連鎖く検診

【Nコード】

N9692P

【作者名】

華山楽

【あらすじ】

短編でまとめられそうな短い話です。
連鎖シリーズ。卓也とかおりのお話です。

第一話 式神（前書き）

そろそろ他の人が主人公の話を書こうと思っているのですが、中々筆が進みません。

第一話 式神

「卓也、組織から伝言の式神が来たよ」

声の主の名前はかおり。

『組織』によって人工的に創りだされた術者だ。

午後、日差しが柔らかく屋根の上でまどろんでいたら鳥が結界内に入ってきた。

結界に入ってきたということは、卓也がそれを許したということ。かおりはさして警戒せずその鳥を腕に止まらせた。

「ありがとう」

かおりの声に応えたのは宮神卓也。

『組織』の術者にして、かおりの保護者。

そして『組織』内では幹部クラスである『宮』の『名』を十代で父親から継承した人間だ。

自室にいた卓也は、かおりの腕に留まっている鳥を自分の腕に留まらせた。

「じゃあ、私は行くね」

「ああ。俺は『コレ』しただけで出かけるかもしれない。かおりはどうする？」

卓也は式神の鳥を指差しながら言った。

「家にいる。今日は気持ちがいいから」

そう言っただかおりは立ち去った。

卓也はそれを見送るとゆっくりとドアを閉め、念のための簡単な簡易結界を部屋に張った。

「……………」

数秒式神の鳥を見つめると、鳥は翼を広げ卓也に言葉では無く羽に込められた念を卓也の頭に直接送り込んだ。

念は脳裏に情報として刻まれた。

「…クツ…」

情報が刻まれる一瞬、苦痛を感じたのか微かに呻いた。

「……………」

卓也は暗い顔をして鳥を見た。

「…最後…通告…か…」

ポツリとつぶやいた。

卓也は鳥の頭に手をかざすと、その手のひらが一瞬光った。

「返事をお前の主に届けてくれ」

卓也は窓の戸を開けると、簡易結界を外し式神を空へと放った。

そして、それが見えなくなるまで空を眺めていた。

「かおり」

庭を歩いていたかおりを卓也は呼び止めた。

「何？卓也。出かけるの？」

卓也の元に駆け寄るとかおりが聞いた。

「いや…今日は出かけない。明日お前と一緒に出かける」

「仕事？」

たまに急ぎの仕事で依頼が入ったその日の内や、翌日に慌ただしく行くこともあった。

「いや…」

「卓也？どうしたの？」

かおりを呼んだときから卓也の顔色が余りよくない。

いつもなら歯切れの良い返事をする卓也が、珍しく言いよどんでいる。

「検診だお前の…『科学者』達が業を煮やしたみたいだ」

一拍おき、卓也は言つべきことを言った。

「…そう。分かった」

かおりはその言葉を聞くと、僅かながら気配が硬くなった。

「すまない。もう少し伸ばせると思っていたんだが…これ以上は…」

「気にしないで。ここに来て半年、一回もあそこに行かなかつたの不思議に思ってたぐらいなもの。そっか、卓也が止めておいてくれてたんだね」

卓也の自分を責める言葉にかおりは、いつもの調子を取り戻した。

「ああ」

「大丈夫だよ。多分そんなに時間はかからよ。何日かあそこに泊まって、前にやっていた検査するだけ」

「送り迎えはする」

「ありがとう。大丈夫、なれてるから」

なんでもない。

それを強調しなければならない。

卓也のためではない。

自分のために。

自己暗示。

大丈夫だという暗示。

たとえ嫌な事があっても、笑顔でここに戻ってくるために必要なこと。

卓也の笑顔を見るために。

「ああ。…ああ、そうだな」

「うん」

卓也はかおりの自己暗示に気がついたのか、気がついていないのかは分からないがいつも通りの笑顔に戻った。

「じゃあ、明日に備えて今日は食べに行こう!」

「調子がいいな。かおり…」

「何食べよっかな」

そんなとぼけた事を言いながら、笑っているかおりを見る卓也の心は幸せに満ちていた。

何時^{いつ}までも、このままです…そう望^{いっ}むほどに。

第一話 式神（後書き）

短くてすいません…。

第二話 ここから

翌日、卓也はかおりと施設を訪れた。

出迎え、案内してくれた局員が卓也の入れるところまで二人を案内した。

「宮神様はここまですりになります」

あるドアの前まで来ると局員が言った。

「分かりました」

卓也はそれに素直に応じ、かおりもそれに倣った。

「じゃあ。卓也、行って来るね」

かおりはいつも通りの笑顔で、ドアの中へと入っていった。

「ああ、行ってらっしゃい」

「うん」

ドアが閉じられるまで卓也は見送った。

「卓也君」

閉じられたドアを見つめていると、声をかけられた。

「え？あ、真坂さん」

卓也がかおりを引き取ると同時にこの『研究所』を辞めた元『科学者』だ。

「半年振りか。良くここまでもたせたね」

半年間かおりを、ここに連れて来なかったことを感心しているのだ。

「はい。『組織』の式神はチョコチョコ見に来てましたから、そのせいだと思いますけど」

卓也はあえて監視を追い払ったりしなかった。

ある程度の情報があれば、あちらもそんなに急^せぐことは無いだろうと思ったからだ。

思惑通り、半年もった。
まあまあ、長いほうだ。

「そうか…」

「はい」

「こっちの応接室を使わせてもらっている。時間があるならどうだね？」

真坂が近くにあるドアを指差した。

「はい。ぜひ」

「ここは引退して引き払ったんだが、時々来ていてね…局員がそれなれと、使っていないここを貸してくれてね」

所狭しと真坂の私物が置かれ、ソファ―に詰まれた山をどかしつつ言った。

「そうですか」

「いやゝ。自分の陣地があると物が増えてしまっただけ結局引き払う前と似た様な状態になってしまった」

何とか二人が座れるようにすると、腰掛けた。

「でも、きつとここにある部屋のどこよりも居心地がよさそうです」

「まあね」

苦笑しながら、真坂が答えた。

「あの」

「何かな？」

「かおりはいつごろ検査、終わりますか？」

なんとなく落ちつく、卓也が言った。

「かおり…そういえば名前を君から貰ったんだね」

真坂の苦笑が微笑に変わった。

「はい」

「そうだね。最初だからね…恐らく二三日かかると思うよ」

真坂は少し考えると言った。

「そうですか…」

「終わったら連絡するから、家に帰ったら？」

「はい。そうしますが…もうしばらく…」

卓也はドアの方を見ながら呟くように言った。

「そうかね…」

真坂もまた、卓也と同じ方向を見て先ほどチラリと見えた少女の顔を思い出していた。

「はい。すみません」

「いいんだよ。私は引退したから、あそこから先には行けない」

「…はい」

「そして、守秘義務が引退してからもあるから、何も教えることはできない」

「分かっています。…真坂さん」

卓也は視線を真坂に戻し、真坂も卓也に視線を戻した。

「何だね」

「ありがとうございます」

卓也は頭を下げながら言った。

「……………」

「俺をかおりと出会わせてくれて。かおりを引き取るときに助けてくれて」

そう、全ての始まりは卓也が父に連れられてここを訪れた時から始まった。

父は真坂に会いに来たのだ。

だから、全てのきっかけは真坂がつくつたのだ。

そして、真坂は卓也がかおりの保護者になるとき密かに後押ししてくれたのだ。

それが決定打になったのかは分からないが、卓也は無事かおりを引き取ることが出来た。

「いいや。全て私のエゴだよ。私は彼女を哀れんだ…そのために自分勝手に動いたそれだけだ」

僅かな沈黙のあと、真坂は言った。

「そのために、ここをやめなくてはいけなくなった」

卓也はそう思っている。

出なければ急すぎる。

真坂が辞めたのは、卓也がかおりを引き取るのと前後している。

真坂は、このプロジェクトの責任者の一人だ。

簡単に辞めることは出来ないし、辞めようとも思わないはずだ。

かおりのこれからの経過観察もある。

今回のようなことが。

でも、真坂はここにいる。

ここで、卓也と共にいる。

だから、卓也は思っているのだ。

真坂が何らかの形で卓也に手を貸し、その代償としてここを辞めさせられたのだと。

「自分から辞めたんだよ。彼女が『外』に出たのならもう思い残すことは無いからね」

「なぜですか？」

かおりに関しては、まだ先がある。

いや、これからだと言ってもいいはずだ。

なぜなら、生きてここを出られたのはかおりだけだから。

「…そうだね…簡単に言えば情が移ったって所だろうね」
「…かおりだけですか？情が移ったのは」

ここには数え切れない『命』があつた。
かおりの、血が繋がらない家族達が…。

「…それまでののは割り切つていた。でも…最後の最後の生き残り…
生かしたいと、行き続けてほしいと願つてしまつてね…」

昔を思い出すように、目を閉じて真坂が言つた。

「…そうですか…」

卓也は納得はしていない。

真坂も全てを話しているわけではない。

隠している事もあるのだろう。

「…私のエゴを実現してくれてありがとう…」

卓也はこの言葉で終わらせた。

これでいい、それでいいのだ、と…。

「…俺は俺の願いのためにしたことです。あなたにどんな思惑があつても、協力してくれたことに感謝するだけです。ありがとうございまして」

「…どう、いたしまして」

「では、そろそろお暇させてもらいます」
聞きたいことは聞いた。

今日中にはかおりが出てくることは無い。

もう、ここにいらなくてもいい。

「そうか、じゃあ、えつと…かおりが出てくる時に連絡するね」

「お願いします。迎えに来ますので」

「分かつた」

「では」

「ああ、またね」

「はい」

そして、卓也は帰つていった。

「これから先は…私は何も出来ないのだね…どうか…」

第三話 離れて

そこには等身大の人形がいた。
いや… いるように見える。

人形のように、生気無く佇んでいるものは生きている。
人間かどうかは定かではないが、人型を持っている。

かおりだ。

卓也と別れた後、かおりは人形になってしまった。
かおり自身もなぜこうなるのか、分からない。

ただ卓也と別れた後、自然と卓也と会う前の状態に戻ってしまったのだ。

言われたことをただやる、人形に。

案内をしてきた局員は、最初、『科学者』が喜ぶだろうと思って
いた。

感情豊かなかおりをみて。

しかし、卓也と別れるとかおりは人形になってしまった。

扉を閉め、一歩前にいたかおりを覗き込んだ。

数秒だ。

かおりから目を離していたのは。

その数秒でかおりの心は凍ってしまった。

かつてここにいた時のように。

卓也によって解けていた心が、再び…。

かおりにもこの凍った心が元に、卓也と共にいた時のようになる
のかどうかは分からない。

卓也の前に行けば自然と戻るのか、前回と同じように何かしらの
きっかけが無いと戻らないのかは分からない。

しかし、今はこれでいい。

かおりは僅かに残る思考でそう思った。
ここで感情は必要ない、と…。

第四話　ここは…

「連絡ありがとうございます」

数日後、卓也は真坂の連絡を受けてかおりを迎えに来た。

「私は約束は守りますよ。君が守ってくれたようにね」

真坂は言った。

「…直前になるまで忘れていましたが…」

そう、あの日樹によって忘れていた過去を思い出すまで忘れていたのだ。

ただ、強くなる。

そう思ったこと意外は。

「それでもだよ。私は過程も結果も大事にする。…かおりのことは、過程はどうであれ結果としては約束を守ってもらった。それだけでいいんだよ」

「はい」

「局長がここまでかおりを連れてきてくれるからね」

ここは、正面玄関。

送って来たときは中まで入れたが、今回はここで待つように言われた。

「はい。分かりました」

「…私は中に入ることは出来ないし、何も言えないが…」

前回、卓也がかおりを送ってきたときと同じ事を真坂が言った。

「はい」

それでも真坂は、自分が言えることを探すように思案するように目を伏せるとポツリと言った。

「恐らくかおりは…」

「はい…」

「とてもつらい目にあつたと思うよ」

「……………」

「ここにいた時と、今とを比べる必要があるからね…」

「…そうですか…」

僅かな沈黙をはさみつつ会話は続いた。

「…表情が…」

「え？」

「表情が無かったそうだよ」

「…そうですか…」

卓也の声は沈んでいった。

「お出ましたね」

会話に多少の区切りがつくと、どちらとも無く黙り込んでしまった。

しかし、真坂が局員につれられてくるかおりを見つけた。

「かおり」

卓也は真坂の示したほうへ、視線をはしらせた。

「お待たせしました」

局員の背後に無言でかおりがついて来ていた。

「いいえ」

「では、引き渡します」

「…はい。行こう。かおり」

卓也の声に反応したのか、かおりは俯いた状態で足を進めた。
「……………」

「では」

反応の無いかおりの肩を抱き、卓也は歩き出した。

かおりはここに居るべきではない。

「次の検診の通知は後日に」

二人の後ろ姿を見送りつつ、局員が言った。

「……………」

卓也は立ち止まり、チラリと局員を振り返ると一言言っただけで再び歩き出した。

「宮神様」

「…失礼します」

「あまり言っな」

二人の姿が見えなくなると、真坂が言った。

「ですが…」

「お前も研究者だな」

「……………」

「己自身もそうだが…」

「かおり…」

車にかおりを乗せ、卓也自身も運転席に座った。

「…た…」

「うん」

「卓也…」

かおりの顔に表情が戻った。

「うん。お帰り。かおり」

卓也は嬉しそうに微笑み、かおりもそれを返した。

「ただいま。卓也」

「じゃあ。帰ろうか」

「うん」

車は走り去っていった。

第四話 ここは…（後書き）

とりあえずこれで終わりです。今度はもっと長い話を書きたいです
…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9692p/>

連鎖～検診

2011年6月11日21時38分発行